

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

翼を持つ女性：

ペルー、パコパンパ遺跡におけるシンボリズムとイデオロギー

(愛知県立大学学術フォーラム開催記念特集号
「神獣と古代王権」, 6)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5539

6. 翼を持つ女性： ペルー、パコパンパ遺跡におけるシンボリズムとイデオロギー

関雄二*

1. はじめに

本発表はパコパンパ遺跡で出土した考古学遺物における図像表現の分析をとおして、中央アンデス地帯形成期（紀元前 3000 年～西暦紀元前後）における社会の複雑化の様態を探ることにある。その際、単に両者の相関関係を追うのではなく、権力と記憶の形成という二つキーワードで解釈を試みる。

本シンポジウムの趣旨に記された国家は、アンデス考古学においては、西暦紀元後の前期中間期に成立したモチェ、もしくはモチーカと呼ばれる政体にさかのぼるとされ、本発表が対象とする形成期よりかなり後に成立したと考えられている。しかしながら、近年の形成期研究によれば、すでに形成期後半において、何らかの社会的なランクや階層が成立したとされ、その意味で、国家形成に至らなかったとしても、形成期のデータを読みとることによって、後に成立する国家の性格を分析する上で貴重な示唆が得られることが予想される。その際、注目するのは、図像であり、この図像分析をとおして、当時の社会的リーダーがどのように権力を行使しようとしたのか、あるいは逆に、どのような図像をリーダーが利用し、それがコミュニティの記憶にどのように深く刻まれていったのかを考えてみたい。



図 1： パコパンパ遺跡と北部山地のおもな形成期遺跡

2. 建築と墓

パコパンパ遺跡は、ペルー北高地、カハマルカ県にある形成期の祭祀センターである(図 1)。海拔 2500 メートルに位置し、中核部は三段の基壇より構成される。下の基壇より番号が付けられ、第三基壇、すなわち最上段の基壇に重要な建物が集中する(図 2)。2005 年より、国立民族学博物館はペルー国立サン・マルコス大学と協定を結び、共同調査を開始し、現在に至っている。

パコパンパ遺跡は、これまで複数のペルー人考古学者によって小規模な発掘が行われてきたが(Rosas y Shady 1970; Fung 1976; Morales 1980,1998)、論文等の報告は少なく、大規模な調査は、われわれの調査が初めてとあってよい(Seki et al. 2010)。しかしながら、過去の調査のデータのうち、編年に関しては今日でも利用できる。それらによれば、パコパンパ遺跡の利用は、おおきく二つの時期に分かれる。この二時期については、われわれの調査でも再確認され、I 期、II 期と名付けることにした。C14 データにより、I 期を前 1200 年～前 800 年、II 期を前 800 年～前 500 年にあてた。

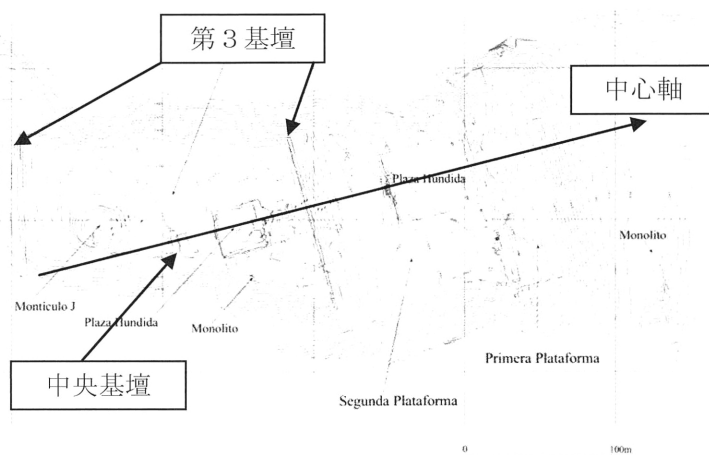


図 2： パコパンパ遺跡の地形図と中央基壇の位置

*1956 年東京生まれ。国立民族学博物館研究戦略センター教授ならびに総合研究大学院大学教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979 年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の母体が作り上げられた形成期（前 2500 年～紀元前後）における社会の成立と変容を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。単著として『アンデスの考古学』（同成社）、『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、共編書として『文明の創造力』（角川書店）、『アメリカ大陸古代文明事典』（岩波書店）、『古代アンデス 神殿から始まる文明』（朝日選書）がある。

(1) I期の建築(図3)

現在、遺跡の地表面に露出している建築のほとんどはII期にあたり、I期の建築はその下に隠れているため、ほとんどは発掘によってのみ遺構が確認できる。例外は第三基壇の西側に建つ円形構造物である。直径約28メートルで、オリジナルの高さは6メートル強の円筒形の構造物である。内部には土や礫がぎっしりと詰まっており、建物上面が利用されていたと想定しているが、未調査であり、昇るためのアクセスも発見されていない。円形構造物の正面、すなわち東側基部には、約20cmの高さのベンチ状構造物が三つ設けられていた。中央のベンチ状構造物が最も大きく、2.1m×0.94mである。いずれも丁寧に泥の上塗りが施され、隣接するベンチ状構造物との間には仕切りの壁が設けられていた。またベンチ状構造物の東側に広がる床面上には、赤く焼けた円形の炉も発見されており、火の儀礼の存在が示唆される。なおベンチ構造物は、野外にあり、どこからでも目撃できたと考えられる。

円形構造物の東側には、少なくとも長さ50m以上にもなる大型の基壇(西基壇)が控え、そのアクセスも北端で発見されている。

西基壇に面した部分の南側には、中央基壇が建てられた。基壇上には、東側からのアクセスを持つ5つの小部屋が設けられた。最初の部屋(東端)の床面には、とくに建物の中心軸に沿って多数の炉が切られ、床面が焼けていた。炉と床面は少なくとも4回張り替えられていた。円形構造物のベンチ同様に火の儀礼が行われていたとみてよい。この部屋の南北それぞれに別室が付設されていた。残りの2つの部屋の床面には張り替えられた痕跡はなく、使用頻度が低かったと考えられる。最初の2つについては、ほぼ中央に入口を持つが、最後の部屋(西端)は左右対称に二つの出入り口をもっていた。いずれにしても、全体として、中心軸に沿うように左右対称に部屋が配置されていたことになる。

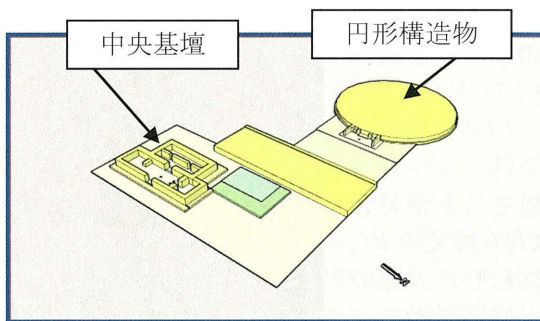


図3：I期の中央基壇

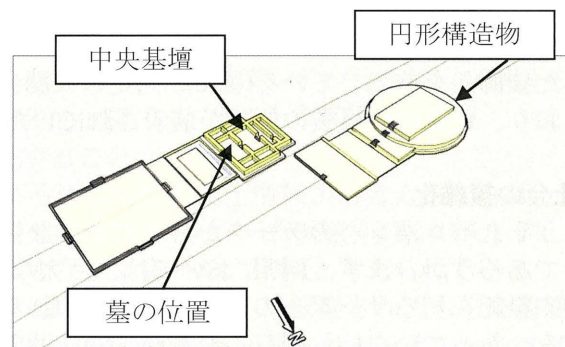


図4：II期の中央基壇

(2) II期の建築(図4)

II期になっても、I期に建てられた円形構造物は再利用される。外周壁はさらに高くなうように継ぎ足される。ベンチ状構造物はすっかり埋められ、埋め土の上に方形基壇が築かれ、中央に階段が据えられた。

西基壇も一部再利用され、円形構造物の中心軸と交差する付近に階段が設けられた。中央基壇は埋められるが、その上に再び部屋が建てられた。部屋数は一つ増えて4部屋となり、全体として西側に拡張されている。興味深いことに、これらの部屋の中心軸は、I期のものを踏襲している。なお入口から最も奥に入った、すなわち西側の部屋の入口は、中心軸から北にずれた場所にあり、内部空間の秘儀性が高まったことが予想される。

I期との大きな建築上の違いは、中央基壇の東側に半地下式広場が設けられた点である。一辺が30メートルで、各辺の中央には階段が設けられていた。また半地下式広場の北側と南側には、低層基壇が設けられ、中央基壇とあわせて、いわゆるU字形の配置を見せている。これらの建物群は、中央基壇からのびる軸を基準に対称的に築かれている。

さらにこの中心軸を東に延ばしていくと、第二基壇に設けられた50m×50mの方形広場の中心を貫き、パコパンパ遺跡と向かい合うラ・カピーヤ遺跡の中心付近を通り、前800年ころに星座のスバルが出現する場所を示すことが坂井正人とフアン・パブロ・ビジャヌエバの研究で明らかになりつつある(Sakai et al. 2008)。スバルが、アンデスにおいて農耕の開始時期を決定する重要な星座であることを思えば、建造物と農耕の豊饒性とに相関関係があったことも指摘できよう。

(3) 貴婦人の墓(図 5)

中央基壇の調査で最大の収穫は、重要な人物の墓を発見したことである。通称「パコパンパ貴婦人の墓」とよばれる。重要と断定する理由の一つが、発見された場所である。パコパンパ I 期、および II 期において採用された建築上の中心軸に位置していたのである。もう少し正確な位置をいうと、II 期の中央基壇上に設けられた最初の部屋、すなわち東端の部屋の中央であった。層位としては、I 期の建物を埋め、II 期の建物を築く途中であり、建設途上における儀礼的埋葬と考えられる。墓は地下式墓であり、土坑の口径は約 1m、表面には最後に置かれていたと思われる大型の石が突き出ている。その下にはさらにもう一つ大きな石があり、それらを除くと約 1.5m 埋土が続いた。その後安山岩の平石が複数現れ、その下から土器が出土した。北に小型ボトル、南側に注口取っ手付き鉢、高杯とその上に載った小型鉢の計 4 点である。その深さから、土坑の口径は 0.6m ほどに狭まり、平石が斜めに潜り込んでいた。その平石を取り上げると、下から金製品を含む副葬品を伴う埋葬が発見された。

埋葬は横臥屈葬状態で見つかり、性別は女性、年齢は 20 代から 30 代。身長は 160.5cm と高い。当時の北部高地の女性の平均は 140cm、男性でも 150cm である。頭蓋骨には変形が認められた。また頭部には辰砂（硫化水銀）と藍銅鉱が塗られていた。副葬品として、金製耳輪 1 対（直径 6cm）、金製耳飾 1 対（26×11cm）、さらに首飾りなど海水産の貝を材料にした装飾品を確認している(図 6)。両足の大腿骨は貝製のバンドで結ばれており、足首にも貝製の飾りが装着されていた。

3. 社会の複雑化

こうしたパコパンパのデータからどのような社会像を描くことができるのであろうか。まず、I 期においては、巨大な建造物は存在するため、建築や祭祀を司るリーダーの存在はうかがわれるが、それらしき人物の墓はみつからない。むしろ祭祀建造物を共同体全体の協同労働で支えるような社会であったと考えられる。この推測は、これまで日本調査団が手掛けてきた北高地のワカロマ遺跡などでも同様の傾向が認められていることから妥当性は高い(Terada and Onuki 1982, 1985)。

一方で II 期になると、「貴婦人の墓」が登場する。埋葬自体は II 期が機能する直前であるので、正確に言えば II 期のリーダーの姿を現しているとは言い難い。しかしながら、少なくとも II 期の開始時には、墓の被葬者のような人物が存在していたことは間違いなからう。著者が注目するのは、特殊な墓の構造、副葬品、そして頭蓋変形である。なかでも頭蓋を変形するのは、通常、乳児期までには、頭部に板を当てるなどの処置を開始しなければうまくいかないことを考えれば、この被葬者は、幼少期、あるいは生まれながらにして、ある種の社会的役割を担うことが決まっていたことになる。これはリーダーが、その能力によって後に選ばれるのとは異なる原理であり、社会的地位、あるいは階層の萌芽ともいえる。辰砂についても希少価値が高く、社会的地位の高さを示唆する。また建築の項で述べたように、中央基壇の部屋へのアクセスを含め、儀礼への参加者を限定し始めている点も、一部の人間や集団への権力の集中が始まったことを示している。

こうしたリーダーの権力基盤は、希少価値のある工芸品の入手とそのコントロールであったと考えられる。金製品や海岸地帯との交流を推測させる貝製品が副葬品として出土していることからの推測である。また、これまで触れなかったが、II 期に銅製品の出土が増加する点が最近判明しており、その生産や流通も権力基盤と関係があったことが想定されつつある。このような社会集団における差異化、あるいは権力の発生は、パコパンパ遺跡のみならず、日本調査団が 1988 年より 20002 年まで手がけたクトゥル・ワシ遺跡でも確認されており、形成期後半の特徴ともいえる(Onuki 1995)。

では、こうした権力の発生と図像との関係はどのようなものであったのだろうか。



図 5: 「貴婦人の墓」

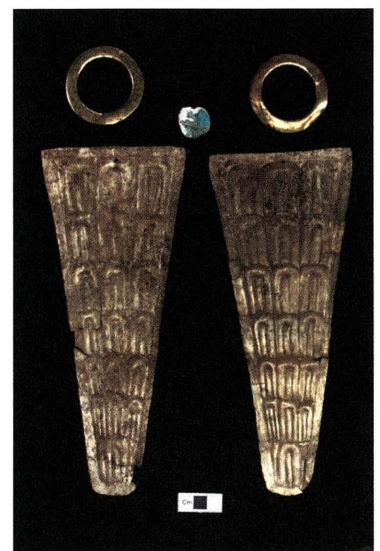


図 6: 「貴婦人の墓」の副葬品

4. 鳥と女性の図像

I期にせよII期にせよ、余剰生産物の存在を示唆する構造は見つかっておらず、リーダーの権力基盤が単純に経済にあったと思わせる点は少ない。むしろII期の権力基盤で説明したように、希少価値のあるものの生産や流通のコントロールにこそ重要であるのだが、そのとき忘れてはならないのが、これらの品の祭祀的性格であろう。パコパンパで発見された副葬品は被葬者の装飾品というよりも、その人物が携わった儀礼にかかわる品として見たほうがよい。こうした点を考えれば、副葬品に表現された図像に注目すべきであろう。

「貴婦人の墓」の副葬品で唯一図像らしい図像とは、三角状の耳飾りに表された鳥の羽根のような文様である。打ち出し技法で表現され、単純に隅丸方形の二重線が重なるように描かれている。これを鳥の羽根と考える根拠は、別の図像の存在にある。パコパンパ遺跡からは、石彫が何体か出土しており、その一体に注目すべき図が描かれている。リマ市にあるラルコ・エレラ博物館に収蔵されている2体の石彫のうちの1体がそれにあたり、胴体が人間で、顔がネコ科動物的な図像が描かれている(図7)。この胴体の両脇には、三角状の突起が認められ、翼と考えられる。しかも、この立像の性器部分は、牙をむき出しにした口のように開かれており、いわゆる鋸歯状ヴァギナになっている(Lyon 1978)。この点で女性性が認められることになる。この点は、パコパンパの墓の被葬者の性別とも一致する。確かにこの石彫の時代的位置づけは、発掘者ラルコ・オイレの報告がないために確定することはできないが、発掘に従事したパコパンパ村の住民による他の石彫の出土情報から考えるならば、II期と考えられる。なお石彫は1点ではなく、ネコ科動物の丸彫りが2体、へびの浅浮き彫りが1体、鳥の浅浮き彫りが1体知られており、いずれも出土状況に不明な点が多いが、II期と考えられている。

さらに興味深いのは、II期の後半、中央基壇や周辺の遺構が改修もしくは放棄されても中央基壇付近で、さまざまな儀礼が継続されていた痕跡がある。浅い土坑が掘られ、火が焚かれた。そこからは獣骨、銅製のピンや針のほか、骨製品が出土している。織物加工と関連する針、マントをとめるピンなどは女性性を表す奉納品であることから、女性性がここでも確認され、過去に埋葬された「貴婦人」の記憶が長く刻まれていることが想像される。

5. 図像の継承と再解釈

では、こうした女性性に付属する鳥やネコ科動物の図像はどこに起源が求められるのであろうか。パコパンパ遺跡における図像は、すでに触れた金属製品、石彫に加えて土器という媒体でも見ることができる。むしろ土器のほうが図像表現に豊かさだといってよい。土器に関しては、すでにペルー考古学者によって、タイプや装飾の記述が行われており、発表者が持つデータともほぼ一致する。それらによれば、I期とII期とでは、胎土、器形、装飾の点で異なる傾向を示しており、一見して区別は容易である。とくにI期の土器では、器壁がやや上方に開く鉢の外壁面に刻線で文様が描かれることが多い(図8)。製作過程において、粘土が乾く前に刻線をいれ、焼成後に刻線間の面に顔料を充てんする技法が用いられる。描かれる文様は、幾何学文様が多いが、ネコ科動物、へび、猛禽類が単独、あるいは組み合わせたものもある。頭部が単独で描かれることが多く、胴部の図像はまれである。

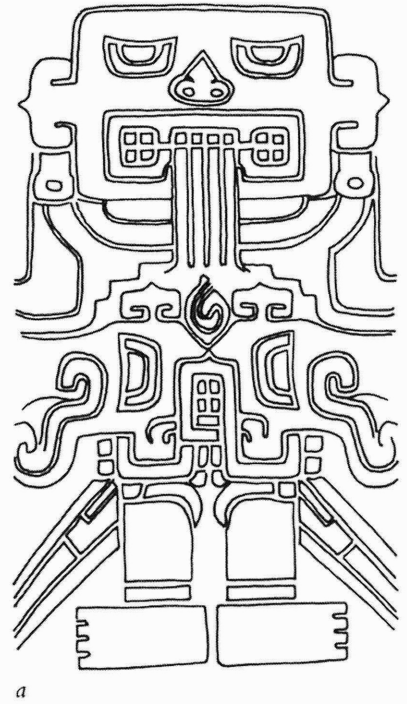


図7: パコパンパ出土石彫からおこした図(Roe 1974)

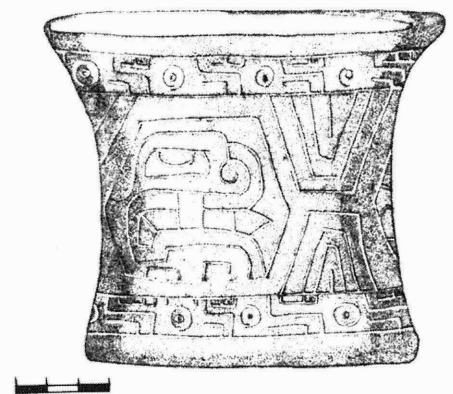


図8: パコパンパI期の土器(Morales 1980)

これに対して、II期の土器では、I期に比べて、彩色が減り、還元焼成による灰色、暗褐色、黒色の土器が増える。酸化焼成による赤褐色の壺類も大量に生産される。II期の図像は、I期に比べて具象的なものが減る。還元焼成土器には、ネコ科動物の胴体に現れる斑点を想起させる二重円や圏点文が多く見られる(図10)。例外は、象形土器もしくは儀礼用の仮面の一部と考えられるタイプで、そこにはネコ科動物の顔の正面が立体的に描かれる。

なかでもI期の土器における鳥の図像に関しては、相対的出現比率は、ネコ科動物の図像より多いとはいえないが、北高地の他の遺跡と比べると目立つ(図9)。I期に当たる北部の遺跡ではネコ科動物ばかりが目立ち、鳥は極端に少ない。パコパンパのI期では、その双方が出現していることになる。この場合、I期の鳥はとくに性別と関連なく描かれる。一方で、II期の土器における表象はネコ科動物関係の図像が優越し、鳥は目立たなくなるものの、石彫や金製品に鳥の要素は残っていく。こうした状況を考えると、II期における鳥、あるいは鳥とネコ科動物を組み合わせた表現の起源は、I期にあると考えたほうが理解しやすい。

一見すると、I期とII期の土器の相違は大きく、パコパンパ遺跡の編年の基礎もそこにある。すなわち土器だけ見るならば、全く交渉を持たなかった別個の集団が別々にこの遺跡のある場所を利用したように見えるのである。しかしながら、すでに述べたように、建築においては、相違よりもむしろ類似が見られる。時間的差異を考慮に入れるならば、連続性といってもよい。よく観察するならば、これには描かれる媒体を超えた図像の連続性も含まれる。ただし、ここでいう連続性とは、単なる継承ではない。そこには、図像を選択し、再解釈していくプロセスが存在したと考えられる。この点は、まだデータが少なく、現状では推測の域を出ないが、社会の複雑化の過程を考えると、「パコパンパの貴婦人」に代表される社会的リーダーが、権力掌握の資源として、全く新しい要素を導入するのではなく、過去、すなわちI期で使用された動物図像のうち、鳥とネコ科動物を組み合わせた要素を選択し、女性性と組み合わせさせていったという解釈も成り立つ。

実施に、こうしたプロセスを同時代に成立したチャビン・デ・ワントルの図像に見出す研究もある(Rick 2004)。そこでは、イデオロギーを司るリーダーが権力を掌握するにあたって、それ以前から登場する動物図像や汎アンデスの要素である幻覚剤を図像に採用しながらも、そこに人間的な要素を加え、リーダーのみがその領域を統御できることを示したという仮説が提示されている。パコパンパにおける人間的図像は先にあげたラルコ博物館収蔵の石彫だけであり、チャビンのように多くはないが、これをII期とする可能性が高いことを考えるならば、パコパンパでもチャビン同様に、動物と人間の融合が、権力生成過程の途上で認められることになる。

このように、土器のタイプ分類や胎土などの製作技法の観点で見れば、全く異なる文化と同定しがちなものでも、図像という認識レベル、あるいは景観と結びついた建築の配置などの空間認識からみると、強い関係性が認められる。繰り返すが、要

は、こうした連続性、共通性を単なる伝統として片付けるのではなく、社会の複雑化や権力の形成と結びつけた脈絡の中で解釈することで、個別の意味を見出していくことが必要なのである。

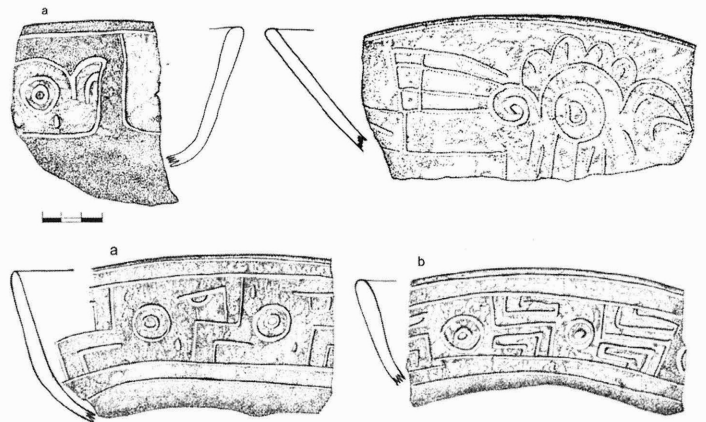


図9: パコパンパI期の土器における鳥の図像 (Morales 1980)

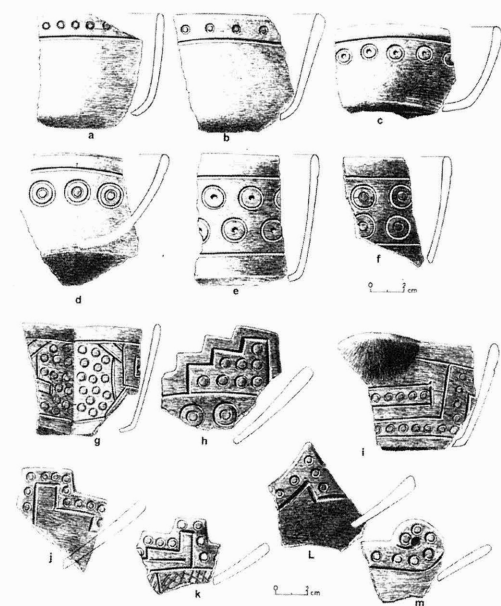


図10: パコパンパII期の土器 (Rosas y Sahdy 1970)

参考文献

Fung, Rosa Pineda

1976 Excavaciones en Pacopampa, Cajamarca. *Revista del Museo Nacional* XLI: 129-207.

Lyon, Patricia

1978 Female supernaturals in ancient Peru. *Ñawpa Pacha* 16:95-144.

Morales, Daniel Chocano

1980 *El dios felino en Pacopampa*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

1998 Investigaciones arqueológicas en Pacopampa, departamento de Comarca. *Boletín de arqueología PUCP* 2:113-126. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima

Onuki, Yoshio

1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos sitios Formativo en el norte del Perú*. Tokyo: Hokusen-sha.

Rick, John.

2005 The evolution of authority and power at Chavín de Huántar, Peru, in K.J. Vaughn et al. (eds.), *Foundation of Power in the Prehispanic Andes* (Archaeological Papers of the American Anthropological Association Number 14), pp.71-89.

Roe, Peter

1974 *A Further Exploration of the Rowe Chavín Seriation and Its Implications for North Central Coast Chronology* (Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology Number 13). Washington D.C.: Dumbarton Oaks.

Rosas, Emilio La Noire y Ruth Shady Solís

1970 *Pacopampa: Un centro Formativo en la sierra nor.-Peruana*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

Sakai, Masato, Juan Pablo Villanueva, Yuji Seki, Walter Tosso y Araceli Espinoza

2008 Organización del paisaje en el Centro Ceremonial Formativo de Pacopampa. *Arqueología y Sociedad* 18: 57-68. Lima: Museo de Arqueología y Antropología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

Seki, Yuji, Juan Pablo Villanueva, Masato Sakai, Diana Alemán, Mauro Ordóñez, Walter Tosso, Araceli Espinoza, Kinya Inokuchi y Daniel Morales.

2010 Nuevas evidencias del sitio arqueológico de Pacopampa, en la sierra norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 69-95, Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.

Terada, Kazuo y Yoshio Onuki

1982 *Excavations at Huacaloma in the Cajamarca Valley, Peru, 1979*. Tokyo: University of Tokyo Press.

1985 *The Formative Period in the Cajamarca Basin, Peru: Excavations at Huacaloma and Layzón, 1982*. Tokyo: University of Tokyo Press.

6. Doncella alada: Simbolismo e ideología en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú

Yuji SEKI*

El objetivo principal de esta ponencia es dar una interpretación sobre la complejidad social del Período Formativo (B.C. 3000 - A.D. 1) en los Andes Centrales a través del análisis de la iconografía presentada en los materiales arqueológicos recuperados del sitio Pacopampa, Perú. En este caso, el artículo se centra no solamente en correlacionar dos componentes culturales, sino también en realizar una interpretación de dos elementos, como son la formación del poder y de la memoria.

El establecimiento del estado para la arqueología andina se remonta a la sociedad Moche o Mochica establecida durante el Período Intermedio Temprano. Dicho periodo es más tardío que el Período Formativo, al cual la presente ponencia se enfoca. Sin embargo, los estudios recientes sobre la sociedad del Período Formativo nos indican que ya existía alguna complejidad, como rango o clases sociales. En este sentido, los estudios enfocados a dicho período contribuyen a la aclaración de las características del estado andino que aparecerían posteriormente.

El sitio Pacopampa está ubicado en la sierra norte del Perú y se ha confirmado la cronología de dos fases como Pacopampa I (1200 a.C. - 800 a.C.) y Pacopampa II (800 a.C. - 500 a.C.) pertenecientes al período Formativo. El descubrimiento de una tumba asociada a los ofrendas de oro en la fase II nos indica que apareció la complejidad social en dicha fase. La diferencia en las características de la cerámica entre ambas fases es grande y suficiente para designarlas como fases distintas. Es decir, únicamente analizando la cerámica podríamos llegar a la conclusión de que existían dos ocupaciones totalmente diferentes y no-relacionadas. Sin embargo, en el aspecto arquitectónico se destaca la similitud entre ambas fases o la continuidad desde la fase I a la fase II. Al mismo tiempo, se incluye en este tipo de similitud o continuidad la iconografía del animal felínico, el ave y la serpiente presente en diferentes medios, como son los monolitos, el metal y la cerámica.

No obstante, la continuidad no indica simplemente una sucesión de la tradición cultural o iconográfica. Aquí existiría un proceso de selección o reinterpretación de la iconografía para reorganizar el simbolismo en el contexto ideológico o político. Aunque aún no es más que una suposición, debido a lo escaso de la información, considerando la diferencia de la complejidad social de ambas fases, es muy posible que el líder de la sociedad de la fase II aprovechara los recursos existentes anteriormente, como las representaciones iconográficas, para lograr el poder sin introducir recursos nuevos.

* Profesor del Museo Nacional de Etnología